第59回国民体育大会公開競技スポーツ芸術熊谷市主催事業

武人還る

―くまがやの埴輪たち―

ごあいさつ

熊谷市では、このたび彩の国まごころ国体公開競技スポーツ芸術主催事業の一環として、「武人還る－くまがやの埴輪たち－」を開催することといたしました。

この展示には、国の重要文化財である上中条出土の短甲武人と馬形の埴輪が、120年ぶりに里帰りすることとなり、大きな話題として数多くのマスコミにも取り上げられました。

古墳時代に造られた、熊谷を代表する埴輪たちが、時を越えて21世紀に生きる我われの目の前に勢ぞろいいたします。ぜひ、この機会に、多くの市民の皆様にご覧いただければ幸いです。

短甲武人のもつやさしさとりりしさ、馬形埴輪のもつあたたかさと力強さが、今まさに、私が実現を目指している「暮らしに優しさと思いやりの感じられるハートフルタウンくまがや」、「何事にも挑戦する力強さのあるまちチャレンジタウンくまがや」の両方の魅力を兼ね備えたイメージを、この二つの埴輪がよくあらわしているように思います。

国体には、全国から大勢のお客様がいらっしゃいます。まごころを込めたおもてなしとともに、熊谷市の誇れる文化のひとつとして、「くまがやの埴輪たち」を大いにアピールしていただきますようお願い申し上げます。

平成16年９月11日

彩の国まごころ国体熊谷市実行委員会
会長　富岡　清

開催にあたって

教育委員会では、彩の国まごころ国体の開催を記念して、熊谷市の特色を生かしたいということで、「武人還る－くまがやの埴輪たち－」を企画いたしました。

これは、国の重要文化財である上中条出土の短甲武人と馬形の埴輪を里帰りさせ、これらの埴輪の展示をメインとしながら、導入部分に一ノ谷・宇治川合戦図屏風を飾り、大胆に郷土の先人熊谷次郎直実をイメージさせてみました。

直実と二つの埴輪、これは熊谷市民の誇りであるとともに象徴でもあると考えます。

この二つの埴輪は、明治９年に上中条で農作業中に発見されたもので、写実的な表現に富み、古墳時代の文化を知る上で貴重なものです。

明治13年から東京帝国博物館（現東京国立博物館）で保管されるようになり、昭和33年に国の重要文化財に指定されました。古墳時代を代表するものとして、歴史の教科書にもしばしば登場し、馬形埴輪においては郵便切手の意匠にもなっています。また短甲武人埴輪の顔立ちは、端正で気品があり、まさに「熊谷の顔」といえるものです。

埴輪は円筒埴輪に始まり、人物埴輪や動物埴輪などバリエーションに富んだ形象埴輪も多くあり、そのひとつひとつの表情やしぐさに、それぞれのメッセージが込められています。この機会に、埴輪たちの声を聞きながら、じっくりご鑑賞いただき、郷土の歴史に対する理解を深めていただけることができれば幸いです。

埴輪たちが語ってくれるように、大切な文化財の保護・活用を図りながら、後世に伝えていくことが、今を生きる我われの責務といえるのではないでしょうか。ぜひ、多くの市民の皆様にご覧いただきたいと存じます。

開催にあたり、東京国立博物館を始めとする、貴重な資料のご所蔵者の皆様や、格別なご協力、ご指導を賜りました関係機関の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成16年９月11日

熊谷市教育委員会教育長
飯塚　誠一郎

凡　例

- この図録は、彩の国まごころ国体公開競技スポーツ・芸術事業　重要文化財埴輪120年ぶりの里帰り「武人還る－くまがやの埴輪たち－」展の解説図録である。
- 本展示会の会期は、平成16年９月11日(土)より同年10月10日(日)である。
- 展示番号は、目録番号と一致する。ただし、展示順序は、必ずしも番号順であるとは限らない。
- 展示品の掲載写真は、形象埴輪に限定している。また掲載写真は、所蔵者・出品者より提供を受けたが、一部は、熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係寺社下博が撮影した。
- 会期中、一部展示替えを行うので、目録に掲載された資料が会場に展示されていない場合もある。
- 使用した中条古墳群及び別府古墳群（在家古墳群・籠原裏古墳群を含む）に関する遺跡分布地図は、20,000分の１の縮尺である。
- 本書の執筆は、寺社下博、編集は、文化財保護係職員が担当した。

目　次

はじめに

Ⅰ　熊谷の古墳と埴輪 ……1

Ⅱ　熊谷の動物埴輪 ……2

①　馬形埴輪 ……2

②　鹿形・猪形埴輪……11

Ⅲ　熊谷の人物埴輪

『上中条像の作風』－『熊谷の顔』……12

Ⅳ　埴輪を出土した古墳……26

①　中条古墳群……26

ア　No.11　獣形鏡 ……27

イ　鎧塚古墳……28

ウ　女塚１号・２号墳……29

②　北島遺跡……30

ア　北島遺跡第１号墳……31

イ　北島遺跡第２号墳……32

ウ　No.71　内行花文鏡 ……32

エ　北島遺跡第５号墳……33

③　別府古墳群……33

④　行田市酒巻14号墳 ……35

⑤　三ヶ尻古墳群・林４号墳……35

Ⅴ　渡辺崋山の古墳調査(三ヶ尻古墳群) …37

Ⅵ　馬・武人埴輪の流転……37

Ⅶ　「武人還る―くまがやの埴輪たち―」出品目録 ……38

Ⅷ　出品協力者・資料提供者一覧……40

はじめに

５世紀の中ごろから６世紀にかけて、関東地方に築造された多くの古墳には、埴輪が設置されていました。そして関東地方では、形象埴輪を中心に独自な埴輪文化が華々しく展開されていったのです。

さて熊谷は、荒川と利根川が最も近接する地域にあって、大穀倉地帯を背景に多くの古墳が造営されています。そして、東に隣接する埼玉古墳群と密接な関係を持ちながら古墳文化＝埴輪文化を展開させ、群馬県の南部を含めて、一大埴輪文化圏を形成しているのです。

埴輪には、墳丘の周囲を取り囲むように設置された円筒埴輪（朝顔形を含む）と、墳丘上もしくは作り出し部や周堤上に設置された、物の形を象った形象埴輪の２種類があります。

円筒埴輪は、古墳の威容を誇示し増幅するとともに、聖域である古墳を日常生活地域と区画するために、その境目に樹立されたものであると考えられています。大きさは、ほぼ古墳の大きさに相似して異なり、また新しくなるほど凸帯の数が少なくなって、スマートになってきます。

一方形象埴輪は、家や盾など器財を象った器財形埴輪、男女の人物を象った人物埴輪、馬や鹿、鳥などを象った動物埴輪に区分されています。権力者の死に伴い、葬送儀礼を示し、権威・権力の継承儀式を形に残すため、あるいはその財力を誇示するため、また死者を邪悪から護るために樹立されたものであると考えられています。

しかしながら、埴輪祭祀の性格は複雑で、形象埴輪の種類や大小、配列の仕方、設置される位置、さらには形象埴輪各個が示す情報 ― 例えば人物埴輪では、顔の輪郭・表情、眼・口の開け方、鼻・眉の付け方、髪形あるいは被り物、彩色の有無、装着した衣装・武具の表現、手足の表現・動作、持ったり着けたりしている道具 ― その独自性と共通性を比較することによって、これらの性格を見極めていくことが必要になってきています。同時に、人物埴輪の腕の芯部分が空洞になるような技術（中空技術）と粘土棒をそのまま腕とするもの、また馬の顔の場合では、円筒でそのまま作るもの、円筒の上に粘土板を貼り付けてより大きな量感をつけるもの、さらには粘土板のみで簡略化しているものなど、全体の製作技術の大きな変化も、需要と供給のバランスを加味して、重要な問題となっています。

こうした形象埴輪は、北関東地方では５世紀の後葉になると、それまで器財形や鶏形が中心であったものが、多様な姿態を表現した人物埴輪が中心となって、葬送儀礼や権威継承儀式を集団として表現した埴輪文化が、一気に華々しく展開されていきます。そして、６世紀半ばには、これを境に、儀式を中心とした様相から、馬などを中心とした財力を誇示する埴輪へと様相が変化していきます。

こうして、関東独自の埴輪文化は、華々しく展開されてきましたが、６世紀の末に至ると、突如、消滅してしまうのです。

このような全体の流れの中で、熊谷の各形象埴輪出土の古墳間では、５世紀の後葉に花開いた鎧塚古墳、女塚１号墳、そして６世紀前半の女塚２号墳や北島遺跡古墳群、６世紀中葉の鹿那祇東古墳（短甲武人や馬形埴輪を出土・いずれも重文）、６世紀後半の別府古墳群（農夫埴輪を出土・県指定文化財）６世紀末の三ヶ尻林４号墳や肥塚古墳群等において、時期ごとに、地域ごとにまとまり、そして変化する様相を示しています。

本展では、各個の技術のすばらしさ・美しさを見ていただき、熊谷の顔を発見すると共に、こうした点を基にして、埼玉古墳群を核とした当地の社会的情勢をも窺う契機となれば、と思います。

I 熊谷の古墳と埴輪

熊谷市は、荒川と利根川の二大河川が最も近接する地にあって、市域の大半は、両河川によって形成された低地帯（熊谷扇状地及び妻沼低地）によって構成されている。台地は、西域と南端にそれぞれ、櫛挽台地と江南台地の一部がみられるにすぎない。

市内には、多く古墳群が所在し、現在230基の古墳が確認されている。このうち低地帯の自然堤防上には、北部地域の奈良古墳群、中条古墳群、中央部地域の玉井古墳群、肥塚古墳群、上之古墳群、南部地域の広瀬古墳群、石原古墳群が所在している他、荒川以南には村岡古墳群等が所在している。また櫛挽台地縁辺部には、北から別府古墳群、在家古墳群、籠原裏古墳群、三ヶ尻古墳群が断続し、江南台地上には、西側に万吉下原古墳群、谷を挟んで東側に瀬戸山古墳群が隣接している。

熊谷市内、特に低地帯に所在する古墳は、過去に墳丘が削平され、下半は洪水に埋没してしまったものが多い。同時に墳丘に設置されていた埴輪も、破壊を受けたものが多く、運良く周溝に転落したものが残存している状況であって、残存状況は、決して良いとはいえない。

こうした状況の中にあっても、多くの古墳から円筒埴輪、形象埴輪が検出されており、埴輪をまったく伴っていないのは、在家古墳群、籠原裏古墳群の二古墳群のみであることが確認されている。しかし、埴輪を伴う古墳群にあっても、継続期間の長い古墳群にあっては、埴輪を伴わない古墳を含んでいる場合も多い。

市内での埴輪（円筒埴輪）の出現は、奈良古墳群・横塚山古墳出土のＢ種横刷毛の調整痕をもつ朝顔形円筒埴輪をもってその嚆矢とする。形象埴輪は、中条古墳群・鎧塚古墳の前方部から出土した人物埴輪（破片）が最も古い段階であると考えられている。その後、特に、奈良古墳群、中条古墳群、石原古墳群、別府古墳群、三ヶ尻古墳群、瀬戸山古墳群等において、埴輪文化が盛行するのである。

中条古墳群

II 熊谷の動物埴輪

① 馬形埴輪

馬は、全て全身像で表されている。鞍を載せ、面・胸・尻の三繋をつなぎ、鏡板・鈴（鐸）・杏葉などで飾り立てる飾馬が多い。鞍や飾り立て具の装着されない裸馬もみられるが、繋と手綱は表現されており、いずれも曳馬であることを表しており、馬１頭に馬曳き男子一人のペアで墳丘に配置されている。鬣はきれいに整えら

No.62　横面

No.62　背面

No.8　横面

No.8　背面

れ、結びは円柱状の角型鬣として表現される場合が多い。

まとめて飾馬と呼ばれる中でも、轡の両端に付ける鏡板の形態と種類、面繋の辻金具の種類、胸繋に付く鈴（鐸）の種類と量、鞍の形態と装飾、鐙の種類と表現法、杏葉・雲珠の形態と種類が様々異なっている。

また、馬の体つき自体も、各古墳で異なり、新しくなるに従って足が長く、背が高くなる傾向がみられる。

顔は、いずれも円筒を横にして作り出すことを基本としているが、３種類の異なった方法が認められる。

第１種は女塚２号墳出土の馬が該当し、円筒をそのまま用い、片方を補足して口側とし、口はヘラによって作り出す方法である。猪など他の動物埴輪と同様な作りである。

No.65　横面

No.65　背面

No.66　横面

No.66　背面

第２種は、鹿那祇東古墳、北島２号・５号墳出土の馬が該当し、第１種の方法で基礎を作り出した後、側面に粘土板を貼り付けて、顔の量感を強めたものである。この種の馬に陽物が表現されたものが見られることは注目される。

第３種は、酒巻14号墳出土の馬が該当し、頸から連続する頭部の付け根に円筒を残し、その上面を１枚の粘土板で覆って顔を作り出しているものである。よって、下顎は表現されていない。

No.5 馬形埴輪 上中条（鹿那祇東古墳）出土

飾り馬である。頭部の作りは、横向きの円筒を立体的に用い、中央部に脹らみをもつ。さらに側面に粘土板を付加して量感を強めている。眼は丸く開けられており、周囲をわずかに盛り上げて瞼を表現している。口は閉塞した後、薄く横面まで切り込んでいる。鼻は上面先端部に円孔が2孔開けられている。

鬣は、全体的に低く整えられ、結びは、先端部を太くした円柱状の角状鬣に復元されている。六鈴円形の鏡板の付いた轡から、面繋、引手が表現されている。面繋は、額皮と頬皮から成り、面繋の辻には5点の鋲状辻金具が貼付されている。手綱は、鞍の前輪まで達している。胸繋には四個の馬鐸が付けられている。鞍は前輪・後輪共に垂直に立てられ、障泥は粘土板を貼り付け、前方は胸繋の途中まで及んだ形で表現されている。障泥前部には、粘土紐によって輪鐙が表現されている。尻繋には、素環の雲珠と三鈴杏葉が付されている。また股間には、陽物が表現され、去勢されていない馬であることを物語っている。

頭部の量感と、眼の愛らしさ、口・鼻の配置の妙、全体のバランスなど、馬形埴輪の代表ともいわれ、切手の図案にも採用されている。出土地は不詳であるが、短甲武人埴輪同様、中条古墳群・上中条支群の東端に位置する鹿那祇東古墳からの出土であると考えられている。

高さ82.7㎝。重要文化財。

No.8 馬形埴輪 女塚２号墳出土

飾り馬であり、墳丘北側のテラス上から出土している。顔の作りは、円筒形のまま、口に向けて上下面を押し潰しながら、徐々に上面部分を絞り込んでいる。眼は鋭利に細く開けられており、瞼はあまり表現されていない。鼻は上端部に２孔開けられている。鬣は、やや高く整えられている。結びは、先端部を大きな円形の平坦面とした円柱状の角型鬣であり、一体式となっている。鋲留ｆ字形の鏡板の付いた轡から面繋が表現されている。面繋は、頬皮、鼻皮、額皮が表現され、各辻には４個の鋲が貼付されている。また鼻皮から額皮への連結皮が付くが、この辻には金具が表現されていない。手綱は、鬣の後に伸び、鞍の前輪上で渦巻き状にまとめられている。

胸繋には四鈴が付されている。鞍は前輪・後輪共に垂直に立てられ、縁には鋲留が表現される。障泥は粘土板を貼り付けて、胴下に垂れ下がるように表現されている。障泥の前部に粘土紐が貼り付けられ輪鐙が表現されている。尻繋には、素環の雲珠と、両側面には五鈴が付された杏葉が表現されている。尻尾は角状で、上に張り出された形に表現されている。

復元高72.0cm。

No.62 馬形埴輪 北島遺跡第２号墳出土

墳丘西側のテラスから出土している。飾り馬である。作りは横向きの円筒に側板を付し、脹らみをもった表情を作り出している。口は閉塞した後小さく切り込んでいる。眼は丸く開けられており、瞼をわずかに盛り上げて表現している。鼻は上端部に２孔開けられているが、やや右に寄っている。

鬣は全体に高く整えられている。結びは、先端部を太くした円柱状の角型鬣であり、一体式となっている。素環の鏡板の付いた轡から面繋が表現され、面繋の辻にはボタン状の辻金具が貼付されている。

胸繋には四鈴が付されている。鞍は前輪・後輪共に垂直に立てられ、障泥は粘土板を貼り付けて表現されている。鐙の表現は見られない。尻繋には、素環の雲珠及び三方に鈴が付されている。尻尾は、Ｔ字型に上下に張り出された形に表現されている。脚部が残存していない。

復元高78㎝。

No.65 馬形埴輪 ① 北島遺跡第５号墳出土

墳丘西側のテラスから出土している。飾り馬である。頭部の作りは、横向きの円筒に側板を貼り付け、脹らみをもった表情を作り出している。口は閉塞した後中央に円孔を開け、脇を小さく切り込んでいる。眼は丸く穿たれており、瞼をわずかに盛り上げて表現している。

鼻は前面に２孔開けられているが、やや右に寄っている。鬣は、中央部を一段と高くして整えられている。結びは、先端部を太くした円柱状の角型鬣であり、挿入式となっている。素環の鏡板の付いた轡からは面繋が表現され、面繋の辻には５個の鋲が貼付されている。

胸繋には四鈴が付けられている。鞍は前輪・後輪共に垂直に立てられ、障泥は粘土板を貼り付けて表現されている。

障泥前部には、線刻で輪鐙が表現されている。尻繋には、素環の雲珠と三鈴杏葉が両側に付けられている。

復元高82㎝。

No.66 馬形埴輪 ② 北島遺跡第５号墳出土

墳丘西側のテラスから出土している。飾り馬である。作りは、横向きの円筒に側板を貼り付け、脹らみをもった表情を作り出している。口は円筒部を上下に押し搾った格好で、わずかに開いて左右に広がりをもつ。

眼は丸く開けられており、瞼をわずかに盛り上げて表現している。鼻は上面に２孔開けられている。鬣は、中央部を一段と高くして整えられている。結びは、先端部を太くした円柱状の角型鬣である。八鈴方形の鏡板の付いた轡から面繋が表現されている。面繋は、頬皮、鼻皮、額皮が表現された上に、鼻皮から額皮への連結皮が付き、各辻には２～３個の鋲が貼付されている。

幅広の胸繋には、四鈴が付されている。鞍は前輪・後輪共に垂直に立てられ、障泥は粘土板を貼り付け、周辺部に皮綴を表現した刺突文が施されている。障泥前部には、粘土紐によって輪鐙が表現され、障泥周辺部同様の刺突文が施されている。尻繋には、素環の雲珠と三鈴杏葉が両側に付されている。尻尾は挿入式である。

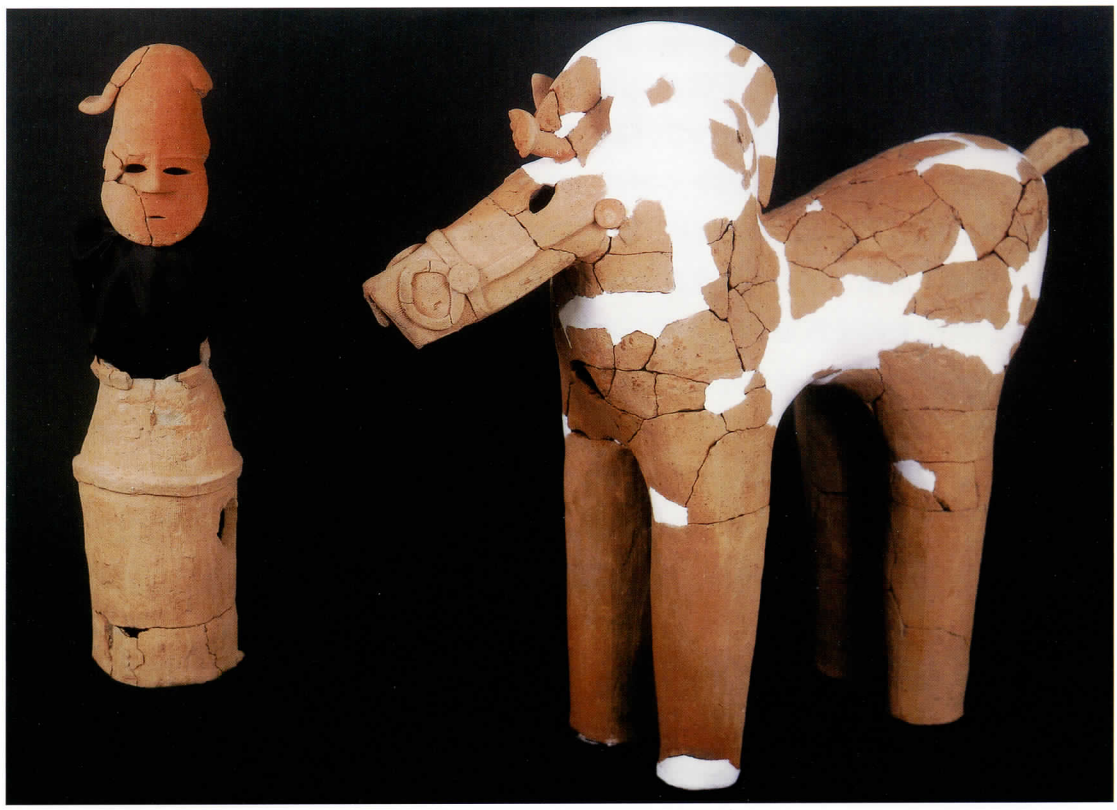
復元高82㎝。

No.6 馬曳男子と馬形埴輪 ① 酒巻14号墳

墳丘南西部に検出された人馬列の先頭に位置する組み合わせである。

馬曳き男子埴輪は、半身像であり、胴部が欠損している。頭部は、振り分け髪が表現され、下げ美豆良が表現されている。顔は、円頭部の下半に粘土板を貼り付け、輪郭を作り出している。頬が丸く、額が長く表現されているため、全体で瓢箪型の長い顔となっている。鼻と眉は、粘土紐を貼り付けて表現されているが、鼻は短く、また付け根部分から杏仁形に眼が切り込まれているため、眉・眼・鼻が一ヶ所に集中した感を呈する。口は小さく切り込まれている。腰の部分には帯が、その下には鎌が柄を腰から浮かして表現されている。基台部との境には凸帯が廻る。

現存高は、頭部が19.0㎝、胴部及び基台部が36.2㎝。



馬形埴輪は、裸馬が表現されたものである。頭部は、顔がわずかに右を向き、作りは、頸部から作り出された長さ５㎝程の円筒上面に、粘土板をＵ字形に貼り付けている。下顎の表現はみられない。鼻の表現も欠いている。眼は楕円形に開けられ、瞼は指頭によって盛り上げられている。鬣は前頭側を特に高くし、頸に移行すると極端に低くなるように整えられている。結びは、円柱状の角型鬣であり、前方に大きく倒れるように表現されている。裸馬であるが、素環の鏡板の付いた轡から面繋が表現されている。面繋は、頬皮と鼻皮のみであり、辻にはボタン状の金具が付けられている。尾は円柱が差し込まれ、先端が指で潰されている。胴部は背が直線的になり、尻が大きく持ち上がっており、肩も頸と肩の区別もつかないほど盛り上がっており、全体で足の長さ、背の高さが強調された馬形埴輪である。

高さ72.2㎝。共に県指定文化財。

No.7 馬曳男子と馬形埴輪 ② 酒巻14号墳

墳丘南西部に検出された人馬列の２番目に位置する組み合わせである。

馬曳き男子埴輪は、半身像である。頭部は、左右に突出した頭巾状の被り物を被っている。美豆良等の表現はみられず、側頭部から後頭部にかけては円筒状となっている。顔は、円頭部の下半に粘土板を貼り付け、輪郭を作り出しているが、顎の部分が欠損しており、詳細は不明である。鼻と眉は、粘土紐を貼り付けて表現されているが、鼻は三角、眉は一本の粘土紐で、顔面全体に及ぶ長さで表現されている。眼は左右に離れ、横長に切り込まれている。口は小さく円形に開けられている。総じて雑な表現であるが、素朴な感は強い。腰の部分・基台部との境には凸帯が廻る。両腕は中実式技術で作られており、右手は上へ、左手は腹へ向けて曲折している。手は潰されて表現されている。

馬形埴輪は、飾馬が表現されたものである。欠損した部分が多いものの、ほぼ全体が知れる。顔はわずかに右を向くと共に、右に捩れている。作りは、頸部から作り出された長さ５㎝程の円筒上面に、粘土板をＵ字形に貼り付けている。下顎の表現はみられない。鼻の表現も欠いている。眼は左が楕円形、右が半円形と異なった表現がなされている。鬣は中央部を特に高くして整えられている。結びは、鬣から延長した板型であり、扇状に大きく前後にはみ出す。素環の鏡板の付いた轡から面繋が表現されている。面繋は、頬皮と額皮のみであり、辻には中央部に円錐状の飾の付いたボタン状の金具が付けられている。鞍は、前輪・後輪共に垂直に立てられ、泥障は長方形の粘土板を貼り付けている。鐙は、粘土を貼り付けて壷鐙を表現している。尻繋はＸ字状に付けられ、交差点上には面繋と同様の辻金具が貼り付けられている。尾は円柱が差し込まれている。胴部は、背が直線的になって尻が大きく持ち上がっており、肩は、頸と肩の区別もつかないほど盛り上がるなど、全体で足の長さ、背の高さが強調された馬形埴輪である。しかも、鈴・杏葉等の装飾も一切省略され、飾馬としては簡素なつくりである。

馬曳男子埴輪・高さ46.7㎝。馬形埴輪・復元高74.5㎝。共に県指定文化財。

② 鹿形・猪形埴輪

No.9 鹿形埴輪 女塚２号墳出土

動物埴輪の中でも鹿形は出土例が少ない。顔は横の円筒を上下に潰した形で、口をやや窄めるように整形している。口の横側には円形の切込みを入れ、愛らしさを強調している。鼻は、上面端部に小孔を二つ開けて表現している。眼はやや細めに開けられ、後方には両耳が屹立している。角は耳の後方に設けられていた痕跡を示しているが、現物とは異なる。

顔は、左下方を向いている。細い頸は左にねじられ、やや両肩が張って、胴は右にひねり、尻は右に流れるような姿勢をとっている。ごく自然な動態を示し、全体で、鹿のもつ優しさが、より一層強調される結果となっている。墳丘北側のテラス上から出土している。　**現存高42.7㎝、胴部長70.0㎝。**

No.10 猪形埴輪 女塚２号墳出土

動物埴輪の中では、鹿形よりもさらに出土例が少ない。顔は横の円筒を上下に潰した形で、口をやや窄めるようにして、平坦面を成すように整形している。口の横側には拉げた円形の切込みが入る。円孔の後方には、上方に伸びる粘土紐の接合痕が両面に確認されており、牙が表現されていたと推定されている。鼻は、上面端部に半円形の円板を貼り付け、前面から二孔を穿って表現している。眼は大きく穿たれ、上面は全体に盛り上がるように表現されている。後方に両耳が屹立している。両耳の間には、鬣の痕跡が認められる。墳丘北側のテラス上から出土している。

頭部長25.0㎝。

Ⅲ 熊谷の人物埴輪

人物埴輪は、性、髪型、被り物、衣服、装着物、所作などの違い、彩色の有無、あるいは半身像と全身像、立像と坐像、坐す姿勢等の違いによって、様々な種類に区分される。このうち女性埴輪は、大部分が巫女であり、他の種類はあまりみられない。一方男性埴輪は、巫女と同じ、神に奉仕する男覡を始め、甲冑を装着した武人、正装した貴人、力士、鷹匠、狩人、盾持人、農夫、楽器を奏でる楽人、馬曳人等々、多種に及んでいる。

熊谷で発見された人物埴輪は、武人、盾持人、農夫、楽器を奏でる楽人、馬曳人等々がみられる。

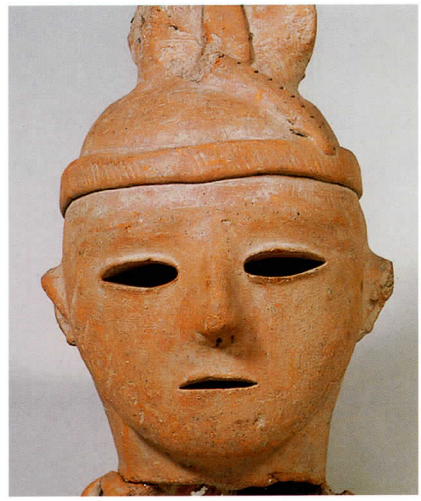
総じて顔の作りが丁寧であり、端正で気品ある雰囲気を特徴としている。

『上中条像の作風』－『熊谷の顔』

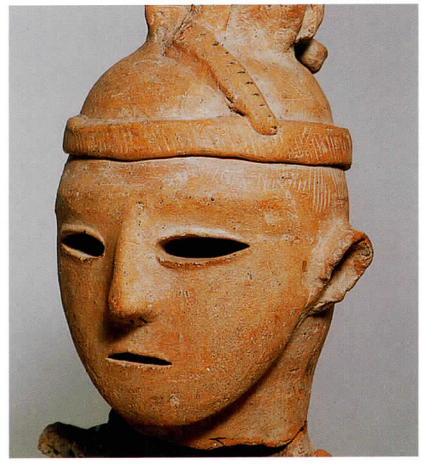
中条古墳群・鹿那祇東古墳出土の短甲武人埴輪は、輪郭の整った顔に、杏仁形の大きな眼が一刀で開けられ、周囲をヘラ先で押さえて上下の瞼が表現されている。さらに筋の通った鼻から、わずかに盛りあがった眉、薄く開けられた口が絶妙に配されている。そして、同じ作風は、共伴している他の人物埴輪にも共通し、同一作者によって、芸術性の高い一群の埴輪たちが製作されたことを物語っている。考古学者・小林行雄が『上中条像の作風』と絶賛し、武人埴輪の中でも絶品といわれる理由がここにある。

参考１・２は、短甲武人埴輪と共に鹿那祇東古墳から出土した人物埴輪（共に関西大学所蔵）であり、同一作者の製作によると考えられている。１は、巫女に対する男覡と思われる人物埴輪（現存高31.8cm）であり、２は衝角付冑を装着した武人埴輪（現存高23.6cm）である。

参考１は、頭部のみの残存であるが残存状況が良好である。頭部は、髪を前から後頭部に上げて輪にし、中央部を紐で固定している。鬢髪を前頭葉から側頭葉にかけて巻き上げ、櫛で留めている（背面は逆）。鉢巻は、後頭部で交差させ、垂下させている。眉・鼻梁の付け方・配置、眼・口の切り込み方、瞼の付け方、



No.14（上・下）



参考１（上・下）

顔の輪郭の作り出し方、どれをとっても、また正面からみても、まさに短甲武人埴輪と瓜二つである。特に斜めからみた時、顎から首筋にかけての表現は巧みであり、あたかも生きた人間が語りかけているようである点は、最も強い印象を与える共通点である。

参考２

No.15

同様な共通点は、加須市に所在する大越古墳群出土の鉢巻をした男子埴輪（No.15）など、異なる古墳群から出土した人物埴輪にもみられる。一人の製作者の作品の流通範囲が知れる。

参考２は、表面が剥落しており詳細は不鮮明であるが、やはり切り込まれた眼・口から共通点が見出され、同一作者の製作によると思われる。

こうした、一つの古墳から共通の特徴をもつ人物埴輪が出土する様相は、中条古墳群・今井支群の主墳である女塚１号墳において、盾持武人埴輪（No.16、18）、冑を被る武人埴輪（No.19）の間でも確認される。

No.16

No.18

No.19

最も大きな特徴は、正面から見たときの端正で気品ある顔立ちが、見下ろすと睨みつける顔立ちに、逆に見上げると柔和な微笑をもつ顔に一変する点にある。眼と口の切り込み方、鼻梁と眉の配置、輪郭の作り出し方に独特の技術と手法がみてとれる。

No.16　上から

No.16　下から

このような、中条古墳群に広がる端正で気品ある、写実性に富んだ、芸術性の高い顔だちは、『上中条の顔』を越えて、正に『熊谷の顔』というべきものであろう。

No.14 短甲武人埴輪 上中条（鹿那祇東古墳）出土

武人埴輪の中で最も良く知られた秀作である。顔立ちは端正で気品があり、頭部と胴部のバランス及び全体のプロポーションが図抜けて良く、また装着している甲冑の表現が的確であることなど、他に例をみない逸品である。

冑は、横矧板鋲留式の衝角付冑であり、衝角の形態、短い庇が忠実に表現されている。

甲は、横矧板鋲留式の短甲であり、正面の引合せ部分や、鋲留め、肩上が的確に表現されている。短甲を装着した人物の埴輪は極稀であり、その点でも価値を高めている。

最も特徴的なことは、顔のつくりである。輪郭の整った顔に、杏仁形の大きな眼が一刀で穿たれ、周囲をヘラ先で押さえて上下の瞼を表現している。さらに筋の通った鼻から、わずかに盛りあがった眉、薄く開けられた口が絶妙に配されている。

冑の下に付く錣、甲の背の最上部に付く押付板、大刀柄、両腕、台円筒下半が欠落している。

出土地は不詳であるが、番地の照合等によって、中条古墳群・上中条支群の東端に位置する、鹿那祇東古墳からの出土であると考えられている。

現存高64.0㎝。重要文化財。

37057

No.16・17 盾持武人埴輪 女塚1号墳出土

盾持武人埴輪は、全て盾の上位に武人の顔が載った半身像で、手足が表現された例はない。

盾は、中央を二重の方形区画、周辺には鋸歯文がそれぞれ沈線で表現され、上の両隅には抉り込みを入れて象られている。頭部は笄帽、両脇には下げ美豆良が表現されている。

顔の表現は短甲武人埴輪と近似し、整った輪郭に、杏仁形の眼が一刀で開けられ、周囲をヘラ先で押さえて上下の瞼を表現している。さらに筋の通った鼻から、わずかに盛りあがった眉が表現されている。ただ、眼がやや短く、口もわずかに上下に広がりをもつなど、微妙な差異も見出される。しかしながら、眼の切り込み角度は絶妙であり、上から見ると睨むような表情となり、下から見上げるとやさしく微笑むような表情をみせる（13ページ写真）。No.16は前方部周溝外堤南西隅、No.17は周溝外堤南の前方部と後円部の括れ部からの

No.16

No.17

出土である。出土位置が古墳域の外縁であり、位置も低いところである。こうした位置にあって、上空・外域から寄せる邪悪を睨みつける様は、古墳に眠る被葬者を守る姿を伺い知るに十分である。

16は完形で、高さ68.0㎝。17は一部欠けており、復元高76.0㎝。

No.18 盾持武人埴輪 女塚1号墳出土

No.16・17の盾持武人埴輪と同一古墳から出土したものであるが、本例は、周溝中堤帯の前方部と後円部の括れ部墳丘側からの出土である。

盾の文様は、中央には、方形区画の内側に上下に二本の横線文、上下横線の内側左右に二本の縦線文、方形区画の周辺には鋸歯文を、全て沈線で表現している。また上位の鋸歯文中には、鋲留が表現されている。形態は長方形を基本としつつ、上下四隅はやや斜め外方に広がり、各辺の中央部はわずかに窪みをもっている。

このように、盾の形態・文様ともNo.16・17とは異なるが、最も大きな違いは頭部の表現である。透かしの入った冠を被ったものともみられるが、髪を団子状に纏め、元を鉢巻で締めていると解した方が良いように思われる。耳は小孔が開けられているのみであり、美豆良は表現されていない。

このように特異な髪型は盾持武人埴輪に限定されているようで、同様に表現された例としては、群馬県群馬町の保渡田八幡塚古墳出土の盾持武人埴輪2体、及び群馬県太田市塚廻1号墳出土の盾持武人埴輪があげられる。

顔の表現はNo.16・17とほぼ同様であるが、顎から頬にかけて粘土を貼り足し、整った顔立ちを作り出している。大きな眼と比較して口の開きが小さく、より引き締まった印象を与えている。上空・外域から寄せる邪悪を睨みつけ、古墳に眠る被葬者を守っていた役割は同一であろうが、出土位置が被葬者により近いところであり、No.16・17より上級の盾持武人を、盾の形態・文様、髪形の差をもって表現したものであろうか。

復元高72.6㎝。

No.19 冑を被る武人埴輪 女塚１号墳出土

眉庇付冑を被る武人埴輪の頭部であり、墳丘前方部の北側から出土している。冑は横矧板を、縦に揃えて鋲留めし、脇から後ろにかけて錏が付く。しかし、眉庇部分、鉢頂部及び錏の先端部は欠失しており、詳細は不明である。顔は、粘土を貼り付けて明瞭な輪郭を作り出し、鼻から眉は粘土紐を貼り付けて表現している。眼は、内側を広く外側を細くして、また口は、細く開けている。頸には貼り付け痕がみられ、首飾りを表現していたと思われる。武人でありながら、顔立ちは優しい。

現存高15.0㎝。

No.23 冠帽を被る男子埴輪 女塚１号墳出土

固定用の帯の付いた冠帽を被る男子埴輪の頭部であり、後円部北側中央の内堀から出土している。背面には、垂れ髪が表現されていた痕跡が見られる。耳は小円孔が開けられるのみであるが、耳前に長さは不明であるものの、下げ美豆良の表現がある。顔は、粘土を貼り付けて輪郭を作り出し、鼻は粘土紐を貼り付け、筋を通して高く表現している。眼は、全体にやや小さいものの上下に開き、内側をやや広くし、口は、中央部がわずかに広がりをもって小さく切り込まれている。顔立ちは引き締まり、好男子の様相を呈している。

現存高16.2㎝。

No.24 鼓を抱えた楽人埴輪 女塚１号墳出土

鼓を左腕に抱えた楽人の埴輪であり、墳丘前方部の南側から出土している。鼓は中央部に脹らみをもつ樽形で、長さ8.6㎝を計る。鼓は、親指を離し、他の４本を揃えた左手でしっかり押さえ込まれ、左の脇に押し付けた状態で抱え込まれている。腕は中空技法で作られているが、全体の重量から推すと、鼓も中空であると思われる。また、本例に近接して琴形埴輪も出土しており、墳丘前方部の南側に楽人の集団が配されていた可能性が高い。

No.25 冠を被る男子埴輪 女塚２号墳出土

墳丘北側のテラス上から出土している。

冠の頂部は表現がなく、空洞となっている。耳は円孔が穿たれ、下端に粘土紐を輪に貼り付けて耳環を表現している。耳前、冠の直下から長さは不明であるものの、下げ美豆良の表現がある。顔は、粘土を貼り付けて、やや長めの輪郭を作り出している。鼻は欠損しており、眉は表現されていない。眼は、細く、やや長めに、口も細く、両端がやや上がり気味に切り込まれている。

現存高17.0㎝。

No.26 女子埴輪 女塚２号墳出土

頭をわずかに左に傾けた人物埴輪の頭部であり、墳丘北側のテラス上から出土している。髪の部分は欠損しているが、島田髷が表現されていたと考えられ、女子埴輪であると思われる。耳は円孔が穿たれ、美豆良の表現も見られないことから、女子埴輪であった可能性は高い。顔は、粘土を貼り付けて、三角顎の輪郭を作り出しており、全体で涼やかな表情が作り出されている。鼻は、高さはないが筋が通り、眉は端がやや下がって表現されている。いずれも粘土紐を貼り付けている。眼は、小さいが、上下の幅をやや大きく切り込んでいる。口は、眼に比べて長く切り込まれている。やや太い頸から、腕に連続している。

現存高10.7㎝。

No.27-1 人物埴輪胴部 ① 女塚２号墳出土

男子埴輪の胴部であり、墳丘北側のテラス上から出土している。逆三角形の胴部に、差込式の両腕が付く。腰には帯を締め、左腰には鎌（？）が差し込まれている。背面には、頸直下にＴ字の貼り付けがみられるものの、上下が欠損しており、何を表現したものか不明である。またＴ字の貼り付けの下部には、帯まで連続した剥離痕がみられ、靫を背負っていた可能性があるが、これも詳細は不明である。

両腕の表現は、右腕は内側に水平に折り曲げられ、左腕は体の中央下位に向けて下げられていたと推定される。腕は中実技法で作られている。

現存高19.5㎝。

No.27-2 人物埴輪胴部 ② 女塚2号墳出土

男子埴輪の胴部であり、墳丘北側のテラス上から出土している。逆三角形の胴部に、差込式の両腕が付く。脇にはそれぞれ円孔が穿たれている。腰に帯はみられないが、腰から下が広がりをもつように表現されている。左腕の付け根には下方に伸びる紐状の表現がみられるが、下方が欠損しており、何を表現したものか不明である。また背面には、①と同様の両肩中央から腰にかけて剥離痕がみられる。両腕の表現は、残存が少なく不明であるが、両腕が前面やや下方に差し出される様相を呈している。腕は中実技法で作られている。

現存高20.0㎝。

No.27-3 人物埴輪胴部 ③ 女塚2号墳出土

半身像人物埴輪の胴部から基台部であり、墳丘北側のテラス上から出土している。円柱状の胴部から腰に帯を巻き、裳へと繋がる。衣装部分に他の表現は見られず、何を表現したものか不明である。しかしながら、胴部上面は窄まりをみせているところから、それほど大きくはなり得ないと思われる。つくりの状況から、冠を被る男子埴輪（No.23）の頭部と同一体となる可能性が大きいが、直接接合されず、上部の作りは不明であるといわざるを得ない。

現存高33.2㎝。

No.59 両腕を突き出す女子埴輪 北島遺跡第１号墳出土

墳丘北側のテラスから出土している。髷は、分銅形に近い板状島田髷であり、元結の紐が角状に立ち上がっている。顔面には、薄く長く盛られた眉、横長に大きく切り込んだ眼、三角形に小さく付けられた鼻、半開きに小さく切り込まれた口が表現されている。眼の周囲は、眉から鼻にかけて角眼鏡状に赤彩が施されている。耳は、大きく開けられた耳孔の周囲を円環状に粘土紐を貼りつけ、さらに片耳４個ずつの耳飾りを付している。腰帯はあるものの、他の着衣の表現は見られない。突き出された腕は、右手が前に出ており、指先を重ね、親指を立てていたと推定されている。腕は、木芯中空技法で作られている。両手を前に突き出しているが、親指を立てていることなどから、物を捧げ持つのではなく、儀式に伴う女子の執り行う礼法の一種を象ったものであると考えられる。

現存高29.3㎝。

No.60 馬曳き男子埴輪 北島遺跡第１号墳出土

墳丘北側のテラスから出土している。顔面には、細く大きく切り込んだ眼、鷲鼻状に付けられた鼻、薄く横長に切り込まれた口が表現されているが、眉はみられない。口は、わずかに左側が持ち上げられたように表現されている。頭には、烏帽子様の被り物をつけているとみられる。耳孔は見られないが、下端に脹らみをもつ棒状の下げ美豆良が表現されている。腕は、木芯中空技法で作られている。着衣の表現は見られない。胸から下については残存しておらず、不明である。簡素な身なりであること、右手を下げ、左手を上に挙げていることから、馬の手綱を取る馬曳きであり、美豆良の表現から男子であることが分る。

現存高19.3㎝。

No.61 鍔付二股帽を被る男子埴輪 北島遺跡第１号墳出土

墳丘北側のテラスから出土している。頭には、広い鍔の付いた二股帽を被っており、鍔の周辺部には赤彩が施されている。顔面には、薄く長く盛られた眉、横長に大きく切り込んだ眼、やや高く三角形に付けられた鼻、半開きに小さく切り込まれた口が表現されている。頬の部分には、検出時、鼻に向かう三角形の赤彩が施されていたといわれるが、風化のため明瞭に観察できない。耳孔は見られないが、円柱棒状で肩に接する長さの下げ美豆良が表現されている。腕は、中空技法で作られている。着衣の表現は見られない。胸から下については残存しておらず、不明である。

表現の状況は、儀式に伴う男子の執り行う礼法の一種を象ったものであり、鍔付二股帽を被っていることから身分の高い男子であると考えられる。

現存高21.7㎝。

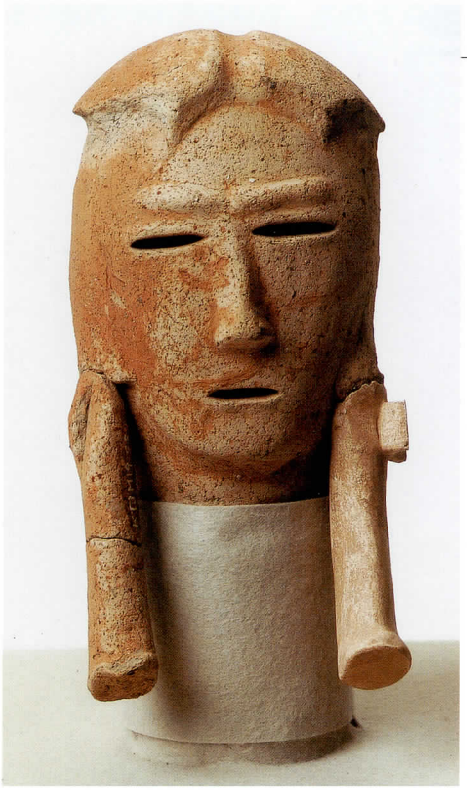
No.63 坊主頭男子埴輪 北島遺跡第２号墳出土

墳丘西側のテラスから出土している。表面が磨滅した部分が多いため、頭部や眉の付近が不明瞭であるが、頭部に表現が何も見られないことから、恐らく坊主頭であったと思われる。耳の表現は、まったく見られない。

顔は、顎下に粘土を貼り足し、エラの張った観を呈している。眉は不明瞭であるが、片方ずつが粘土紐を貼りつけられ、やや吊上がった表現となっている。眼と口は、共に細長く切り込まれているが、口の切込みが大きく、エラの張った観を強めている。鼻はやや高く、鼻筋が通っている。

頸以下が残存しておらず定かでないが、坊主頭と、いかつい顔つきから、力士であったと推定される。

現存高14.2㎝。



No.64 振り分け髪の男子埴輪 北島遺跡第２号墳出土

墳丘西側のテラスから出土している。厚く板状に貼りつけられた振り分け髪は、端部が欠損しているものの、分け目が指ナデで表現されていることが分る。下げ美豆良は長く、円柱状で先端が厚くなっている。元は紐で束ねられていたとみられ、この部分に赤彩が施されている。耳は、小さな円孔が穿たれ、その下に円環状の粘土紐を貼り付け、耳飾りとしている。

顔は、顎下に粘土を貼り足し、輪郭を明瞭にしている。全体に面長の観を呈し、眉は片方ずつが粘土紐を貼りつけて表現されている。眼と口は、ほぼ同じ大きさに、細長く切り込まれており、鼻筋が通り、小鼻が指先でつままれて表現されている。頸以下が残存しておらず定かでないが、馬曳きの男子であったと推定される。

現存高22.7㎝。

No.67 頭巾を被る男子埴輪 北島遺跡第５号墳出土

墳丘西側のテラスから出土している。両側に逆八の字状に張り出した袋状の頭巾を被っている。耳は小さな円孔が穿たれ、その下に円環状の粘土紐の貼り付け痕が見られ、耳飾りとしていた様子がうかがえる。また、残存していないが、下げ美豆良の痕跡が見られる。

顔は、顎下に粘土を貼り足し、輪郭を明瞭にしている。眉は片方ずつが粘土紐を貼りつけられ、やや右が下がって表現されている。眼と口は、細長く切り込まれており、眼は眉毛と同じ長さ、口は鼻の幅と同じ長さになっている。鼻は、鼻筋が通り、ヘラ先で縦長の鼻孔が表現されている。

なお、直接は接合されていないが、右手を挙げ、逆三角形の胴体部分が同一個体であるとみられ、その腰には刀子を備えていたようである。右手を挙げていることから馬曳きであると考えられる。

現存高16.2㎝。

No.68 振り分け髪の男子埴輪 北島遺跡古墳外（37号溝）出土

振り分け髪の分け目が、強い指ナデで表現されており、後頭部が丸く仕上げられている。耳は、小さな円孔が開けられており、下げ美豆良が表現されている。顔は、顎下に粘土を貼り足し、輪郭を明瞭にしている。眉は片方ずつが粘土紐を貼りつけて表現されているが、左右がアンバランスである。眼と口は、ほぼ同じ大きさに、長方形気味に小さく、細長く切り込まれている。鼻は先端が細く、やや雑に表現されている。

頸以下が残存しておらず定かでないが、馬曳きの男子であったと推定される。

現存高11.2cm。

No.15 鉢巻きをした男子埴輪 大越古墳群（加須市）出土

No.15

No.22

No.21

大越古墳群は、利根川右岸の低地帯に造営されている古墳群であるが、現在墳丘のみられるものはない。しかし、人物埴輪が数点出土しており、その内の１点・鉢巻きをした男子埴輪（15）は、中条古墳群出土の短甲武人埴輪（14）の 顔と酷似している。同一作者による製作の可能性が高いものと考えられている。頭部には、二本の鉢巻きをし、後ろで結んでいる。下の鉢巻き直下から、美豆良が下げられていた痕跡がみられる。顔は丸く、大きく切れ長な眼が、目頭を丸く、目尻を細く切り込まれている。その後、ヘラ先で押えて瞼を表現している。筋が通り整った鼻梁から、ほぼ水平で目尻部分がわずかに下がる眉、細く一文字に切り込まれた口、形・大きさ・配置、全てが絶妙である。大型の優品である。

現存高18cm。

大越古墳群では、その他、男子埴輪(21)、及び女子埴輪(22)がみられる。

No.21は、腰に帯を巻き、右

前で結んでいる。左の腰に鎌を差しており、馬曳きの男子埴輪であると思われる。

現在高46.5㎝。

No.22は、頬に２本、及び頸飾り部分に赤彩を施した女子である。頭及び頸から下が欠如している。

現在高22.0㎝。

No.20 農夫埴輪 ヤス塚古墳出土

農夫の埴輪は、人物埴輪の中で最後の段階になって登場する種類であり、埼玉県から群馬県にかけての古墳から出土している。

髪形は上げ美豆良であること、頭には菅笠もしくは笄帽等の被り物を被ること、肩に鍬を担ぐこと、空いた手を曲げ胸に当てること、腰に小刀を佩くか刀子を下げること、半身像であること、台に当たる円筒を長くし高さを強調していること等、多くの共通点をもっている。

こうしたなか本例は、高く筋の通った鼻から、低く真横に伸びる眉、小さく穿たれた眼と口、素朴の中にも品格をもつ造形である。整った輪郭と、誇らしげにつけられた耳環も、これらの印象を強調している。出土状況については不明である。

高さ102.0㎝。県指定文化財。

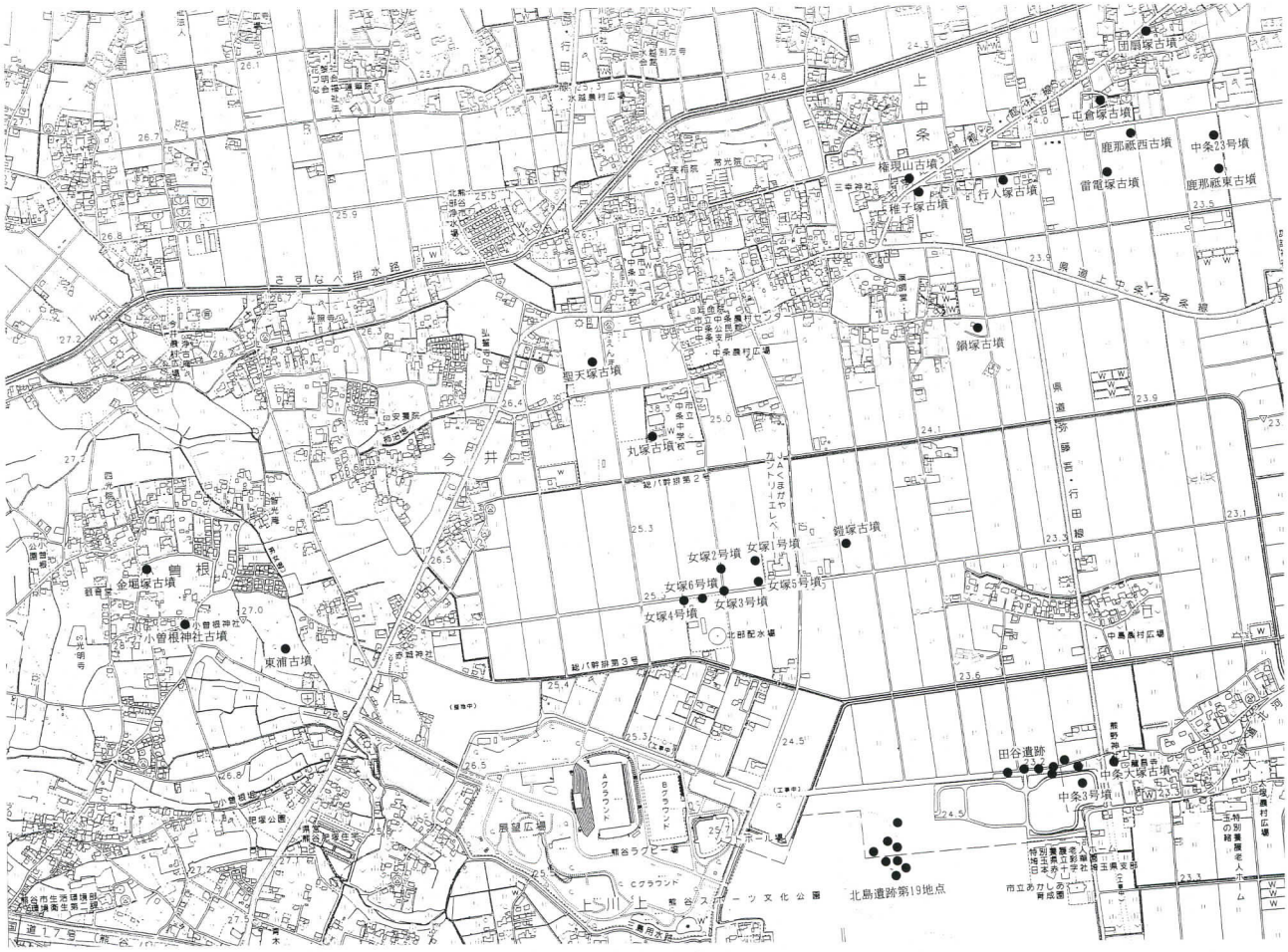
Ⅳ 埴輪を出土した古墳

① 中条古墳群

中条古墳群は、熊谷市の北東隅部、大字上中条、今井、小曽根、大塚の広範囲（東西３km、南北２km）に及び、それぞれが東西に分布する四つの支群から構成されている。

上中条支群は、上中条の北縁に位置し、重要文化財となっている短甲武人埴輪や馬形埴輪の出土した鹿那祇東古墳を東端として、鹿那祇西古墳、団扇塚古墳、雷電塚古墳、屯倉塚古墳、行人塚古墳、鍋塚古墳、稚児塚古墳、権現山古墳等が分布している。これら各古墳のうち発掘調査された古墳は権現山古墳であり、南北37.6m、東西36.9mを計る大型の円墳であることが確認されている。主体部は削平されているものの、南北に長い長方形の敷礫が検出され、南に開口する横穴式石室の存在が推定されている。墳丘の裾部から周溝にかけて、須恵器大甕（頸部補強帯）・甕・提瓶（鉤状把手）が出土しており、その特徴から７世紀前半に比定されている。埴輪の出土は皆無である。このように本支群は、埴輪全盛の鹿那祇東古墳から、埴輪をもたない権現山古墳まで、長期にわたって継続されているのである。

古墳群の中央を占める今井支群は、主に今井地区に位置し、帆立貝式前方後円墳・鎧塚古墳を東端として、女塚１号墳～６号墳、丸塚古墳、聖天塚古墳等が分布している。これら各古墳のうち発掘調査された古墳は、鎧塚古墳、女塚１号墳・２号墳・４号墳である。鎧塚古墳、女塚１号墳は、共に帆立貝式前方後円墳である。盾形の周溝をもつ鎧塚古墳は、墳丘裾部に円筒埴輪が囲繞しているものの、形象埴



中条古墳群分布図

輪は前方部付近からわずかに検出されたにすぎない。しかし、後円部円筒埴輪列の内側には、須恵器高坏型器台を中心にした２次に亘る墓前祭祀跡が検出されている。この西約200ｍに位置する、二重の帆立貝形の周溝をもつ女塚１号墳は、墳丘裾部及び周溝外堤に円筒埴輪が囲繞し、周溝括れ部及び外堤の前方部隅から盾持武人埴輪、前方部から弾琴・鼓・武人等の形象埴輪が検出されている。１号墳に接する２号墳は、径23.5ｍを計る円墳であり、テラス上に円筒埴輪が囲繞し、円筒埴輪の樹立されていない北側には、人物、馬形、鹿形、猪形等の形象埴輪が群を成している。さらに南西に位置する４号墳は、径18ｍを計る円墳であり、主体部として舟形の礫槨が検出されている。埴輪は、円筒埴輪のみが検出されているが、形象埴輪は２号墳同様、未調査の北側部分に集中して群在していた可能性が高い。このように本支群は、ほぼ埴輪全盛時に集中し、出土土器及び周溝内の火山灰の堆積状況から、５世紀の末から６世紀全般にわたって形成されたものと考えられている。

西端の小曽根地区には、東浦古墳、小曽根神社古墳、金堀塚古墳等によって小曽根支群が形成されている。東京国立博物館所蔵の直刀や金銅製飾り金具等、小曽根神社出土品一式は、小曽根神社古墳から出土した可能性が高い。銀装大刀や銀象嵌の渦文が入った八窓鍔などから７世紀初頭に比定されている。正式に発掘調査された古墳は無く、埴輪の存在も確認されていない。

上中条の南端から大塚にかけての区域には、奥壁及び天井が緑泥片岩、側壁が角閃石安山岩切石の切組積で構築された横穴式石室をもつ大塚古墳を東端として、中条３号墳、田谷遺跡１号墳～７号墳、北島遺跡１号墳～８号墳等によって構成される大塚支群が位置している。

大塚古墳は、径59ｍの基壇上に径35ｍの墳丘をもつ大円墳であり、石室内から挂甲小札、金銅装鞘尻金具等が出土しており、当地区を代表する有力者の存在を示している。一方、田谷遺跡１号墳～７号墳、北島遺跡１号墳～８号墳においては、前期末の方墳（方形周溝墓？）、古式の円筒埴輪や盾形埴輪を出土した中期の円墳（田谷６号墳）に続いて、埴輪をもつ古墳ともたない古墳が６世紀前半に展開されている。このように、当地への出現期古墳から埴輪消滅後古墳まで長期にわたって存在（現時点では６世紀後半に属する古墳は確認されていない）していた支群であるとみられる。

ア No.11 獣形鏡 伝中条古墳群出土

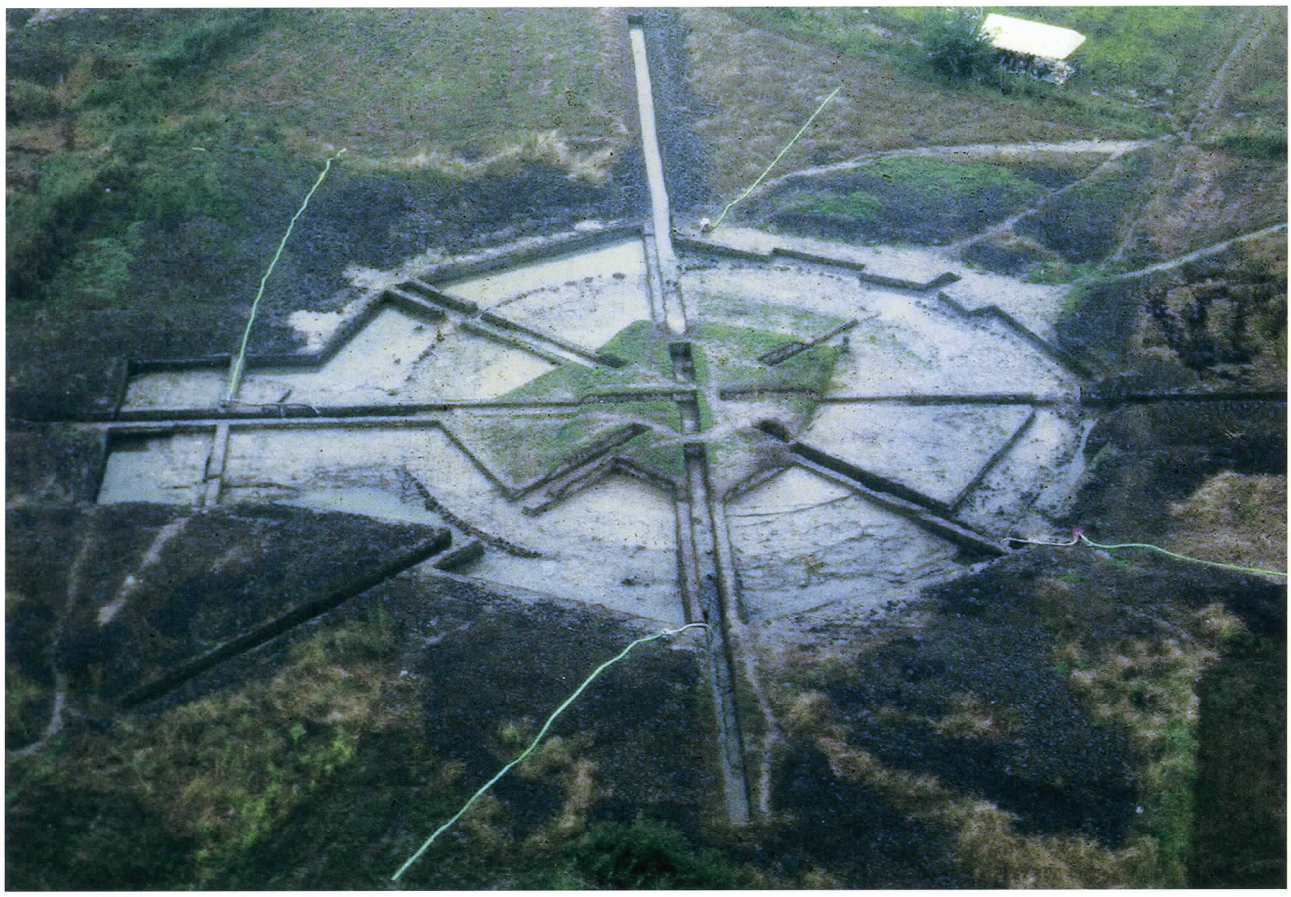
直径12.4㎝、重さ175ｇ。平らな鏡面は縁部で１㎜ほどの反りをもつ。紐は径2.1㎝の半球形を呈し、円座状の界線が部分的にみられる。鏡背文様は、紐の周りに頭部を左にした半肉彫りの獣像が６個体配されている。このため、六獣鏡ともいう。獣形は、三角形の突起で表された頭部、細線で表した長い頸、半肉彫りで強調された胸部と腰部、形骸化した細線で表現された四肢や尾から成っている。獣像は同一図像が繰り返されるが、一つのみ頭部を胸部の下方に表す違いをみせている。内区外周の銘帯部分は、内側が複波文帯、外

側が無文帯になっている。外区は、二重の外向き鋸歯文が廻り、素縁で、幅1.4cmを計る。

中条古墳群からの出土と伝えられており、鎧塚古墳もしくは女塚１号墳出土の可能性が高い。

イ 鎧塚古墳

鎧塚古墳は、中条古墳群今井支群の東端に位置し、全長43.8m、後円部径31.8m、前方部長12.0m・前面幅12.5m、括れ部幅7.0mを測る帆立貝式前方後円墳である。主軸方位はN－90°－Wを示す。周溝は、口縁部側12.5～14.2m、前方部前面4.8mの幅をもち、前方部前面では直線を成している。そのため、全体では卵形に近い変形の盾型を呈することとなる。



朝顔形埴輪を含む円筒埴輪類は、２m当たり７本の割合で墳丘裾部を囲繞している。形象埴輪は、女子と思われる人物の顔部分と、対になる人物の足部分が前方部の南北から分離して出土しており、前方部の上面に配置されていた様相を窺わせる。

人物埴輪出土状況

後円部墳丘裾部の円筒埴輪列の内側には、後円部の中心からみて北東と南東の２箇所に土器集中地点が検出されている。両者には、それぞれを構成する土器群には時期差が認められ、北東土器群を第１次、南東土器群を第２次とすることができる。両群は共に、同一器種で構成され、関東では稀有な存在である須恵器高坏型器台を中心にして、その周囲を取り囲むように須恵器高坏、土師器高坏（内一は大型）、土師器壷（坩）、土師器杯を配している。しかし土師器高坏及び杯の数量は、２次例が一次例の倍を数える。

第１次墓前祭祀土器群出土状況

古墳祭祀の一角を成す、墓前祭祀の様相を示す、貴重な資料となっている。

ウ 女塚１号・２号墳

女塚１号墳は、中条古墳群・中央支群において、鎧塚古墳とともに中核を成す、帆立貝式前方後円墳である。主軸長46.0mであり、墳形と相似形の周溝が二重に廻る。周溝を含めた長軸は62.0mを計る。

３段凸帯の円筒埴輪は、墳丘外周（前方部前面は除く）及び外堤に、それぞれほぼ一周していたとみられる。

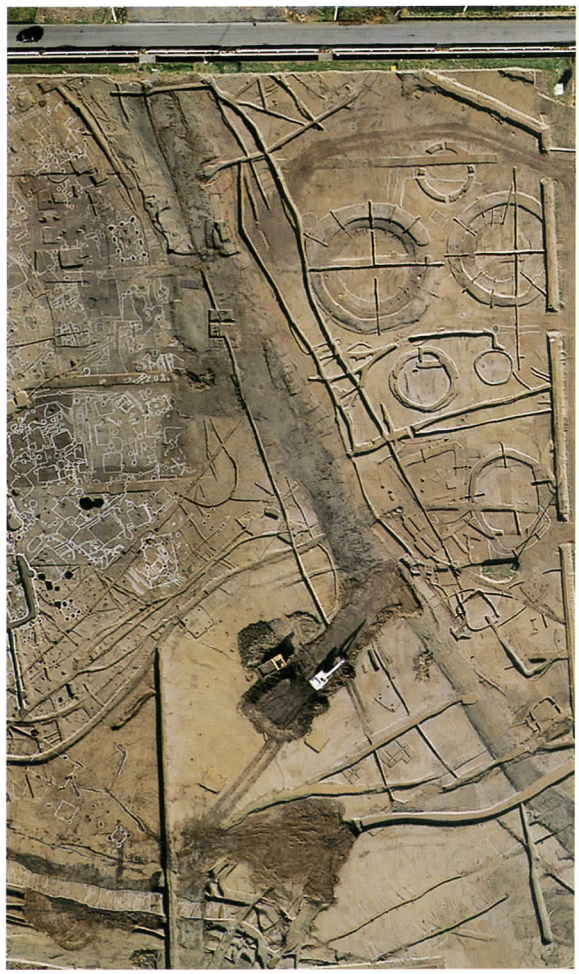
形象埴輪の出土は、ほぼ前方部に限られている。盾持武人埴輪は、16が前方部外堤の南西隅から、17が前方部外堤の南括れ部から、それぞれ外方向をむいて樹立されていた。これとは異なり18は、括れ部の中堤内側からの出土である。その他19・眉庇付冑を被った武人埴輪、24・鼓を抱えた人物埴輪等は前方部から、23・冠帽を被る男子埴輪は、口縁部中央北側から出土している。すでに削平され、墳丘及び埋葬施設等も残存していないが、特に前方部において、武人や楽人集団による埴輪祭祀が展開されていたと推定されている。

２号墳は、１号墳の西に隣接している円墳である。直径21.0～23.5mであり、墳丘の縁辺には2.5～5.0m幅のテラスをもつ。周溝は、幅3.5～6.5mと変化が大きいが、全周している。

円筒埴輪は、２段凸帯で底径の小さなタイプのものが、墳丘外周を一周していたとみられる。形象埴輪は、最もテラスが広い北側に限られて出土している。馬形埴輪（8）が３頭分以上、人物（25～27）も３体以上出土している他、鹿形埴輪（9）猪形埴輪（10）という、動物埴輪類が集中している点に大きな特徴がみられる。

女塚１号墳（左）、同２号墳（右）

② 北島遺跡



北島遺跡は、利根川によって形成された荒川低地と、荒川によって形成された熊谷扇状地の錯綜する熊谷市の北東部、上川上・上中条・今井の地にあって、地形は、湧水地、旧河道、自然堤防が複雑に入り組んでいる。ほぼ熊谷スポーツ文化公園全域を含み、東西1.5km、南北1kmに亘っている。

昭和60年度以降、平成15年度に至るまで、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団及び熊谷市教育委員会によって断続的に発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代、そして古代、中・近世と、連綿と続く複合遺跡であり、中でも７～10世紀がその中核を成していることが判明している。そして、広範囲に及ぶ遺跡内にあって埋没河川や旧地形が確認されると共に、これらを元に夥しい数に上る遺構の密集度を合わせ、居住域、生産域、墓域が組み合わさって構成された集落遺構群の様相が、徐々に明らかになってきているところである。

古墳時代後期の古墳群の検出された第19地点は、

ほぼ東西方向に流れる２本の旧河川に挟まれており、弥生時代中期の大規模な集落跡や堰や水路などの人工灌漑施設、古墳時代前期の集落跡や畑跡及び方形周溝墓群、古代の大集落跡等、夥しい遺構が検出されている。

古墳群は、南北126m、東西55mの範囲に、直径が20～22mの２号・５号、16m前後の１号・７号、10～11mの３号・４号、９m以下の６号・８号という８基が検出されている。第８号は、調査された面積が少なく、詳細は不明であるが、他の７基は６世紀の第１四半期～６世紀後葉に構築されたと考えられている。このうち形象埴輪を伴う古墳は、規模の大きな１号・２号・５号に限られている。同時期であるのに関わらず、古墳の大小、形象埴輪の有無、さらには円筒埴輪事態の有無など、各古墳に差が大きく、複雑な様相を呈する古墳群である。

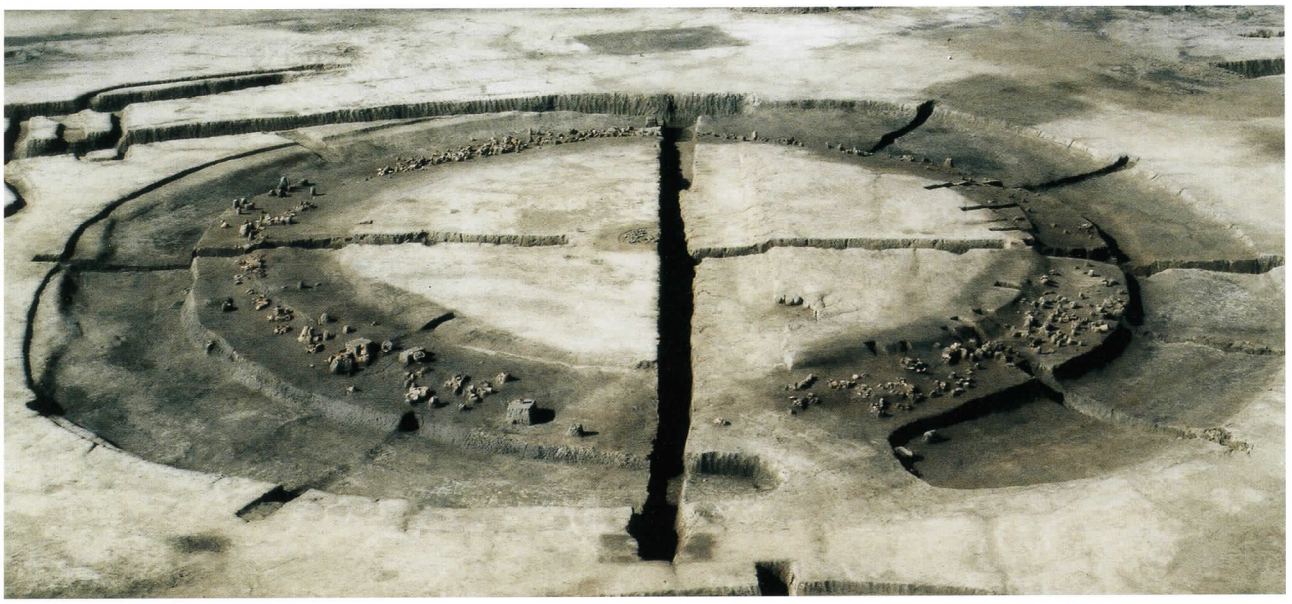
ア 北島遺跡第１号墳

北島遺跡内古墳群の北端に位置し、墳丘径東西16.0×南北15.7m、周溝径東西22.8×南北24.8mの円墳である。墳丘はすでに削平され、主体部は検出されていない。

また、北東及び東側は調査区域外に及んでいるため調査されていない。

形象埴輪は、北側周溝の墳丘際に転落した状態で馬曳き男子埴輪（60）、鍔付二股帽を被る男子埴輪（61）が接するように、その２m西には両腕を差し出す女子埴輪（59）が、また周辺部からは、器種不明の台部、馬形埴輪の頭部・耳部・鞍部、家型埴輪の堅魚木が検出された。墳丘北側のテラス上の一画で、人物・馬形・器財各種の形象埴輪が群を成し、並置されていたと推定されている。６世紀後葉を中心とした築造時期が考えられている。

イ 北島遺跡第２号墳



北島遺跡内古墳群の中央西端に位置し、墳丘径東西22.4×南北21.2m、周溝径東西28.8×南北27.8m、群中最大規模をもつ円墳である。墳丘の大部分はすでに削平されていたが、中央部に礫槨と推定される主体部が検出されている。周溝は、北東に陸橋をもつ。

形象埴輪は、墳丘西側テラス上の一画で、振り分け髪の男子埴輪（64）と女子埴輪を先頭に、北を向いた３・４頭の馬形埴輪が連なっている。そのうち１頭の馬形埴輪（62）に接して坊主頭男子埴輪（63）が検出されている。

北東の陸橋部からは、周溝外側から流れ込んだ状況で内行花文鏡（71）が検出されているが、周溝覆土最上層からの検出であり、直接古墳に伴うものであると断定できない。６世紀第２四半期後半の築造であると考えられている。

ウ No.71 内行花文鏡 北島遺跡第２号墳出土

周溝北東部の陸橋から出土している。直径7.74cm、重さ37.3ｇ、鏡面に１mmほどの反りをもつ。紐は径16.4mm、高さ6.3mmの半球形を呈する。鏡背文様は、紐の周りに円圏をめぐらし、内区には六弧の連弧文と、弧文間に人物を６体配している。人物は、円形の頭を紐側にして、逆三角形の体躯、八の字に拡がる裾部、１本で現した脚部から成っている。腕の表現に差がみられ、異なった姿態を表現している。また、人物文の間には、珠文風の抽象的な

文様を配している。外周には、斜行櫛歯文に重ねて、三重の圏線を巡らしている。外区は、素縁で、幅1.0㎝、厚さ2.0～2.5㎜を計る。

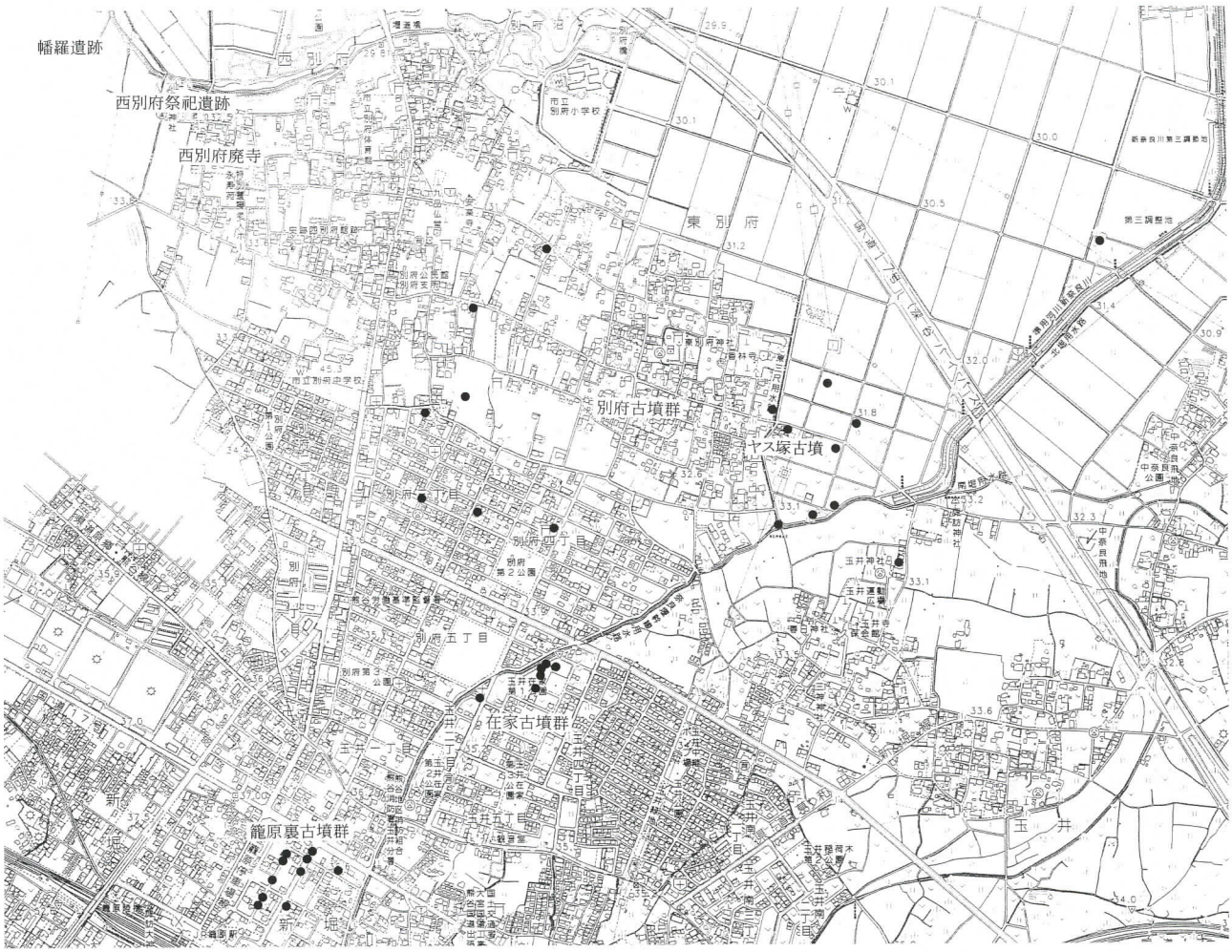
エ 北島遺跡第５号墳

北島遺跡内古墳群の中央東側に位置し、東側が未調査ではあるものの、墳丘径東西20.3×南北20.0ｍ、周溝径東西25.8×南北25.4ｍの規模をもつ大型の円墳である。墳丘の大部分はすでに削平されていたが、墳丘の周囲には幅２～３ｍのテラスが廻っている。

形象埴輪は、墳丘西側テラス上の一画で、頭巾を被る男子（67）・女子の人物埴輪と２頭の馬形埴輪（65・66）が検出されている。いずれも馬曳きに伴われた馬形埴輪が北向きに置かれ、先頭に両腕を後方に高く掲げた女子埴輪を中心とした人物埴輪群が位置している様相を呈していた。６世紀第１四半期の築造であると考えられている。

③ 別府古墳群

大字東別府及び西別府一帯に所在し、前方後円墳及び円墳30基以上で構成されていたと思われるが、大部分が削平され、現在では18基が確認されているに過ぎない。中では、馬形埴輪を出土した前方後

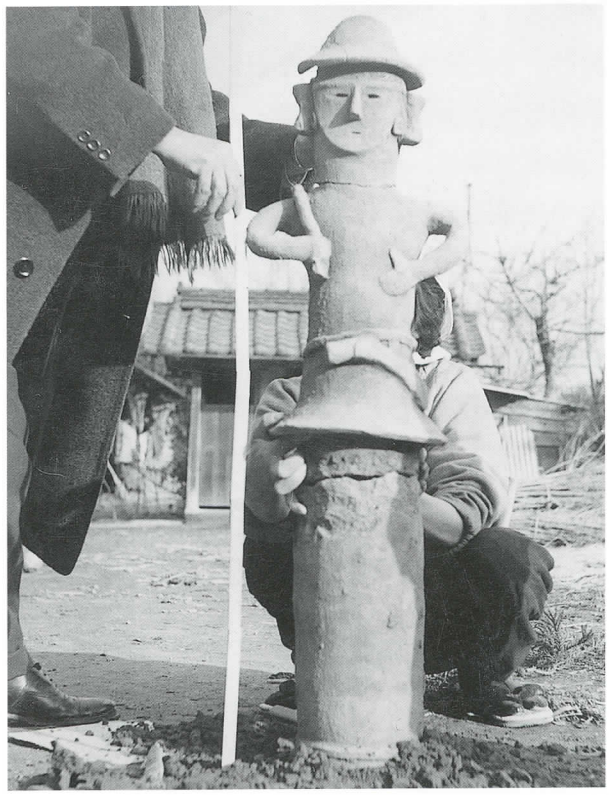


別府・在家・籠原裏古墳群分布図

円墳・カンニチ山古墳、円筒埴輪14点が樹立された状況で検出された円墳・仲廓古墳（推定径18.3m）、県指定文化財農夫の埴輪（20）を出土した円墳・ヤス塚古墳等が知られている。１基が自然堤防上に位置する他は、前方後円墳を含む10基が台地縁辺部（内１基は台地縁辺斜面）に、他の７基は、これより南側の台地の中ほどに所在している。

これらの内、埴輪を伴う古墳は台地縁辺部所在の古墳に限られ、台地中ほどに所在する古墳からは確認されていないという、大きな特徴をもっている。

本古墳群をさらに南下していくと、埴輪をまったくもたない在家古墳群、籠原裏古墳群が位置しているところである。また、西側には、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡、そして幡羅遺跡が所在し、この期に至る時代の変化と共に、古墳構築場所も変遷を遂げていったものと考えられている。



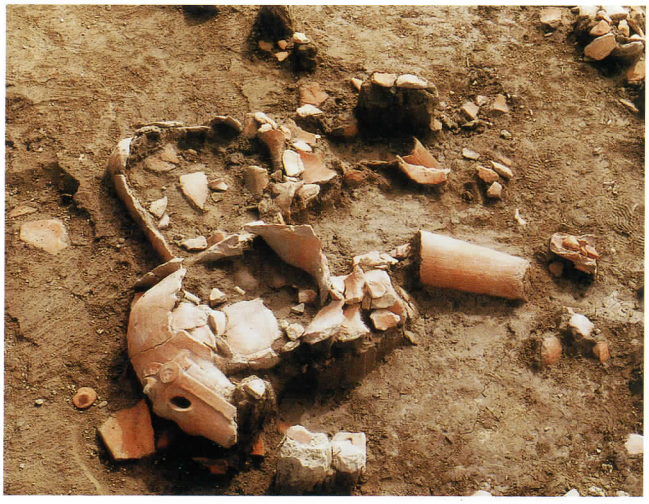
昭和33年　埴輪の発見された農家で

④ 行田市酒巻14号墳

酒巻古墳群は、福川が利根川と合流する右岸の、自然堤防上に立地し、前方後円墳３基を含む20数基の古墳が確認されている。

14号墳は、墳頂部がすでに削平されていたものの、昭和61・62年に全体の１/3が調査され、中段のテラス上から二重に廻る埴輪列が検出された。

埴輪は、外側に円筒埴輪が列を成し、その内側に人物埴輪として正装男子２体、褌を付けた男子（力士）１体、女子３体、馬曳男子４体の他、馬形埴輪４体の計14体の形象埴輪が並んでいたものである。この内馬形埴輪は、裸馬（6）・飾り馬（7）・旗を立てた馬（鞍の後ろに蛇行状の鉄器を取り付け、蛇行状鉄器に旗竿を差し込んだもの）・馬（詳細は不明）と並ぶ。各馬形埴輪は馬曳男子４体とそれぞれ組を成し、正装男子と女子も組を成している。いずれの人物・馬の埴輪からも、朝鮮半島の強い影響がうかがえる。



⑤ 三ヶ尻古墳群・林４号墳

櫛挽台地の東南端に位置する独立丘陵観音山の、北から西側一帯に及ぶ台地地上に、前方後円墳・円墳等で三ヶ尻古墳群が形成されている。現在確認されているだけで62基を数えるが、恐らく100基

を越える古墳が分布していたと考えられている。

このうち発掘調査が実施された古墳は25基に及び、二子山古墳、御経塚古墳、浅間様古墳、運派塚古墳等20数基が残存している。

林４号墳は、調査されたうち最も良く残存していた古墳である。径17.2m、高さ３m以上の円墳であり、上下２段に葺石が施され、中段のテラスには埴輪が樹立されていた。

埴輪には、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪も他、詳細は不明であるものの、天冠を付けた男、刀子を下げた男等の人物埴輪、馬形埴輪、家形・靫形・太刀形等の器財埴輪が検出されている。

訪甑録に図示された運派塚

銀象嵌太刀出土状況

銀象嵌太刀

同　拡　大

主体部は、川原石使用の胴張型（張りは小さい）横穴式石室であり、４体（性別不明の少年１、壮年女性２、壮年～熟年初期男性１）の人骨・歯と共に、直刀４、鉄鏃20以上、刀子６、弓金具４、銅釧４、耳環４、ガラス玉類257、水晶切子玉12、土小玉95、埋木玉１等、多量の遺物が検出されている。

出土した４本の直刀のうち、１本の直刀（No.70・長さ66.7cm、身幅2.8cmを計り、頭椎太刀であったと考えられている）の５ヶ所には、銀象嵌が施されていた。５ヶ所は、いずれも刀の身以外の部分＝刀装具の部分で、柄頭を押さえる柄頭縁金具、鍔を柄側から押さえる柄元縁金具、鍔、鍔を刀身に固定させる鎺、鞘の末端部分を包み込んで押さえる鞘尻金具である。文様は、柄頭縁金具・柄元縁金具には連続半円文、鍔には渦文、鎺・鞘尻金具にはハート形の心葉文がそれぞれ施されている。

刀装具には他に、柄頭に開けられた、飾り紐を通す円孔を補強する鵐目金具、鞘の口を絞める鞘口金具、鞘の途中を絞める責金具、太刀を腰に吊るす紐を通す孔を備え、鞘に通す足金物等がある。

V 渡辺崋山の古墳調査（三ヶ尻古墳群）

渡辺崋山は、天保２年（1831）11月から３年（1832）１月にわたって三ヶ尻の地を訪れ、地誌・風俗・由来・歴史等を調査し、報告書『訪瓰録』にまとめている。三ヶ尻は、三州田原藩主三宅家の故地である。当代の藩主三宅康直は、13代目に当たり、その家譜作成のための資料収集を、田原藩の臣である渡辺崋山に命じたのである。

調査内容には、運派塚、和尚塚、火雨塚と称された３古墳が含まれている。このうち運派塚、氷雨塚については、絵図も伴い、特に詳細な記述となっている。

『　森ノ西八貫メニアリ　此地皆白田ニシテ其廣キ事八九町モアルベシ、故塚幾十ナルヲ不知、世ニ所謂土饅頭ナルモノ上樹竹茂密、望ミ獨山ノ如シ、其高サ大ナルモノ二三丈許、小ナルモノモ一丈五尺許ヲ下ラズ。其中王塚ト称スルモノ尤巨大、文化某年土人相謀テコレヲ發ス、入ル事二丈始テ物アリ、大ニシテ方室ノ如シ、蓋柱皆秩父ノ青石ニシテ白堊ヲ以テ壁トナシ、堅硬ナル事金鉄ノ如シ、内ニ鉄函一、横刀一、鉄鏃数百ヲ蔵ム、鏃多クハ櫻花鞞翦ナルモノ實スルニ木炭ト石灰トヲ以テス、―　中略　―　土人云太古火雨降シ時皆コノ土室ニ逃避セシ故ニコレヲ火ノ雨塚ト呼ブトゾ　―　後略　―　』

と記され、三ヶ尻の地に多くの古墳が分布している様子をうかがわしているのである。

VI 馬・武人埴輪の流転

明治９年（1876）２月２日、一人の耕作者が上中条（当時・武蔵国埼玉郡第十五区上中条村日向嶋耕地）地内の畑を掘っていたところ、偶然、馬形や武人など12体以上の埴輪を発見した。これを聞きつけた人々が見学に訪れ、保管地は混乱を来たしたという。こうして出土した埴輪は、散逸や破壊を恐れた有志たちの手によって保護されていった。

その後、地元の中村孫兵衛が所持していた馬形埴輪は、明治11年（1878）、明治天皇の地方巡幸に際して天覧に供されるほど著名なものとなり、明治13年（1880）には、埼玉県を通して東京帝室博物館の所蔵となるに至ったのである。

一方、地元の江守六郎次が所持していた短甲武人埴輪は、冑山の根岸武香の所有となった。そして明治32年（1899）には、「帝国博物館全国宝物鑑査規定」により「乙要品（歴史上の重要品）」に指定されるとともに、翌年フランス・パリ開催の「パリ博覧会」で展示される日本の紹介本「日本美術史」に写真を掲載することとなった。その写真撮影のため東京帝室博物館に移った短甲武人埴輪は、太平洋戦争中に根岸家に疎開するまで、同博物館に留まっていたという。

こうして多くの人々の手を経た馬形埴輪及び短甲武人埴輪は、共に、昭和33年（1958）国の重要文化財に指定されるに至ったのである。その後短甲武人埴輪は、昭和36年（1961）文化財保護委員会を経て、東京国立博物館の所蔵となっている。

また同時に出土した人物埴輪の頭部は、神田孝平（幕末から明治の学者・官僚、東京人類学会初代会長）が所蔵し、一時竹田玩古堂に移ったが、本山彦一（明治から昭和初期のジャーナリスト、大阪毎日新聞社長）コレクションとして受け継がれ、現在は関西大学博物館の所蔵となっているところである。

Ⅶ「武人還る―くまがやの埴輪たち―」出品目録

「武人の系譜」

No.	名称	点数	出土地	所蔵・管理者	図録掲載頁
1	一の谷合戦図屏風	1点		埼玉県立博物館	
2	宇治川合戦図屏風	1点		〃	
3	常光院観田僧正日記	1点		常光院	
○ 4	龍泉寺本訪瓰録上・下	2点		龍泉寺	36

「花開く埴輪文化」

◎ 5	馬形埴輪	1点	中条古墳群	東京国立博物館	4
○ 6	馬曳男子・馬形(裸)埴輪	2点	酒巻14号墳	行田市教育委員会	9
○ 7	馬曳男子・馬形(飾)埴輪	2点	〃	〃	10
8	馬形埴輪	1点	女塚2号墳	熊谷市教育委員会	2・5
9	鹿形埴輪	1点	〃	〃	11
10	猪形埴輪	1点	〃	〃	11
11	獣形鏡	1点	伝中条古墳群	埼玉県立さきたま資料館	27
12	朝顔形埴輪	2点	女塚1号墳	熊谷市教育委員会	
13	円筒埴輪	25点	〃	〃	
◎ 14	短甲武人埴輪	1点	中条古墳群	東京国立博物館	12・14・15
15	鉢巻をした男子埴輪	1点	大越古墳群	加須市教育委員会	13・24
参考1	男覡	写真	中条古墳群	関西大学博物館	12
参考2	衝角付冑を被る武人埴輪	写真	〃	〃	13
16	盾持武人埴輪①	1点	女塚1号墳	熊谷市教育委員会	13・16
17	盾持武人埴輪②	1点	〃	〃	16
18	盾持武人埴輪③	1点	〃	〃	13・17
19	冑を被る武人埴輪	1点	〃	〃	13・18
○ 20	農夫埴輪	1点	ヤス塚古墳	埼玉県立さきたま資料館	25
21	鎌を差した男子埴輪	1点	大越古墳群	加須市教育委員会	24
22	女子埴輪	1点	〃	個　人	24
23	冠帽を被る男子埴輪	1点	女塚1号墳	熊谷市教育委員会	18
24	鼓を抱える人物埴輪	1点	〃	〃	18
25	冠を被る男子埴輪	1点	女塚2号墳	〃	19
26	女子埴輪	1点	〃	〃	19
27	人物埴輪胴部①②③	3点	〃	〃	①19 ②20 ③20
28	円筒埴輪	2点	〃	〃	
29	円筒埴輪	2点	別府18号墳	〃	

「古墳のまつり・水辺のまつり」

○ 30	須恵器高坏型器台（一次）	1点	鎧塚古墳	熊谷市教育委員会
○ 31	須恵器高坏（一次）	1点	〃	〃
○ 32	土師器高坏（一次）	2点	〃	〃
○ 33	土師器坏（一次）	2点	〃	〃
○ 34	須恵器高坏型器台（二次）	1点	〃	〃
○ 35	須恵器高坏（二次）	1点	〃	〃
○ 36	土師器高坏（二次）	2点	〃	〃
○ 37	土師器坏（二次）	2点	〃	〃

No.	名称	点数	出土地	所蔵・管理者	図録掲載頁
38	朝顔形円筒埴輪	2点	鎧塚古墳	熊谷市教育委員会	
39	円筒埴輪	11点	〃	〃	
40	木製壷鐙	1点	諏訪木遺跡B地点	〃	
41	木製掘り棒	1点	〃	〃	
42	木製竪杵	1点	〃	〃	
43	木製横槌	1点	〃	〃	
44	木製横杓子	1点	〃	〃	
45	馬頭骨	1点	〃	〃	
46	馬前足中手骨	1点	〃	〃	
47	馬後足左脛骨	1点	〃	〃	
48	馬後足中足骨	1点	〃	〃	
49	須恵器坏	1点	〃	〃	
50	須恵器把手付椀	1点	〃	〃	
51	土師器高坏	1点	〃	〃	
52	土師器杯	5点	〃	〃	
53	馬下顎骨	1点	一本木前遺跡A地区	〃	
54	須恵器提瓶	1点	〃	〃	
55	須恵器壷	1点	〃	〃	
56	須恵器甕	1点	〃	〃	
57	須恵器坏	1点	〃	〃	
58	土師器坏	8点	〃	〃	

「国体会場・北島遺跡の埴輪たち」

59	両手を突き出す女子埴輪	1点	北島遺跡第1号墳	埼玉県立埋蔵文化財センター	21
60	馬曳男子埴輪	1点	〃	〃	21
61	鍔付冠帽を被る男子埴輪	1点	〃	〃	22
62	馬形埴輪	1点	北島遺跡第2号墳	〃	2・6
63	坊主頭男子埴輪	1点	〃	〃	22
64	振り分け髪の男子埴輪	1点	〃	〃	23
65	馬形埴輪①	1点	北島遺跡第5号墳	〃	3・7
66	馬形埴輪②	1点	〃	〃	3・8
67	頭巾を被る男子埴輪	1点	〃	〃	23
68	振り分け髪の男子埴輪	1点	北島遺跡古墳外	〃	24
69	円筒埴輪	7点	北島遺跡第1号墳	〃	
70	円筒埴輪	9点	北島遺跡第2号墳	〃	
71	内行花文鏡	1点	〃	〃	32

「埴輪文化の衰退と古墳時代の終焉」

72	円筒埴輪	2点	三ヶ尻林4号墳	埼玉県立埋蔵文化財センター	
73	銀象嵌直刀	1点	〃	〃	36
74	直刀	3点	〃	〃	
75	刀子	2点	〃	〃	
76	鉄鏃	12点	〃	〃	
77	弓金具	3点	〃	〃	
78	銅釧	4点	〃	〃	
79	耳環	4点	〃	〃	
80	水晶切子玉	12点	〃	〃	

No.	名称	点数	出土地	所蔵・管理者	図録掲載頁
81	ガラス小玉	248点	三ヶ尻林4号墳	埼玉県立埋蔵文化財センター	
82	土小玉	104点	〃	〃	
83	埋木玉	1点	〃	〃	
84	円筒埴輪	3点	三ヶ尻林16号墳	〃	
85	直刀	1点	肥塚2号墳	熊谷市教育委員会	
86	鉄鏃	10点	〃	〃	
87	須恵器大甕	1点	大塚古墳	〃	
88	須恵器甕	1点	〃	〃	
89	金銅製鞘尻金具	1点	〃	〃	
90	鉄製責金具	1点	〃	〃	
91	鉄製小札	20点	〃	〃	
■ 92	蕨手刀	1点	熊谷商業高校内古墳	埼玉県立熊谷商業高校	
93	鉄製鵐目（しとどめ）	1点	籠原裏1号墳	熊谷市教育委員会	
94	鉄製鍤（はばき）	1点	〃	〃	
95	銅製双脚足金具	1点	〃	〃	
96	鉄製責金具	1点	〃	〃	
97	鉄製鞘尻金具	1点	〃	〃	

（◎国重要文化財　○県指定文化財　■市指定文化財を示す）

Ⅷ 出品協力者・資料提供者一覧

出品してくださった所蔵・管理者の方々、写真等の資料を提供してくださった方々、指導・助言を下さった方々は、次のとおりです。お名前を記し、感謝の意を表します。

◇文化庁、東京国立博物館、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立博物館、埼玉県立さきたま資料館、埼玉県立埋蔵文化財センター、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、関西大学博物館、行田市教育委員会、加須市教育委員会、行田市郷土博物館、加須市立加須小学校、常光院、龍泉寺、浅野晴樹、岩瀬　譲、大谷　徹、小谷野亨、塩野　博、田中英司、塚田良道、野中　仁、古屋　豊、山口卓也、若松良一

（順不同・敬称略）

第59回国民体育大会公開競技スポーツ芸術熊谷市主催事業
「武人還る ―くまがやの埴輪たち―」
会期　平成16年９月11日(土)～10月10日(日)

発行　平成16年９月11日　熊谷市教育委員会
住所　埼玉県熊谷市宮町２丁目47番地１
TEL 048－524－1111
印刷　朝日印刷工業株式会社

第59回国民体育大会公開競技スポーツ芸術熊谷市主催事業

「武人還る ―くまがやの埴輪たち―」

平成16年9月11日(土)～10月10日(日)

埼玉県熊谷市教育委員会

彩の国まごころ国体熊谷市実行委員会